

百道浜校地移転 20 年

～変わったこと、変わらないこと～

西 輝久

1. はじめに

西南学院中学校・高等学校が現在の百道浜校地に移転したのが2003年4月、2023年現在でちょうど20年を迎えた。中高にとってこの百道浜校地移転は非常に大きな転機になったと言えるだろう。この20年を端的に言い表すのはある意味では容易なことと思う。それは一貫教育を現実的に進めてきた時間であり、「中高一貫教育の深化」と表現することにあまり異論はないのではないかと思われるからである。

本校は中高一貫校として既にこの福岡の地で十分に認知されているが、一貫教育が始まったのは移転の6年前、1996年である。それまで長きに亘って「西南学院中学校」と「西南学院高等学校」として、別々の道を歩んできた2つの学校が1つの学校になったのであるから、「西南学院中学校・高等学校」が全く新しく設立されたのとは事情がまるで違う。まず、一貫教育が実現するまでの中高の足跡を簡単に辿ることから始めたい。

2. 校地移転までの中高一貫の歩み

1916年に開校した旧制西南学院中学部は、第二次大戦後、1947年に6・3・3制が始まったことに伴い、その年の4月から新制の中学校、また翌1948年4月から新制の高等学校という、制度上2つの学校に分かれた。中学校では同年に仮の新校舎を建築、またスタッフもほとんど中高別というように、物理的、心理的に「別の学校」に分離していく。1951年から数年間、一貫教育実現の動きがあり、ほんの短い期間、形としての一貫教育が行われたが、一度別の学校となってそれぞれの状況や立場が変化し、教育の方針にも差異が生じる中で、中高の間で感情の対立が起こってしまい、そのためにすぐに破綻してしまった。([『西南学院百年史』通史編総論第4章第2節6「中学校・高等学校の一貫教育の試みと挫折」])

1970年代から中高教員組合を中心に一貫教育についての議論が交わされ、中高分離から実に約50年の年月を経て、1994年に高等学校が男女共学となり、96年に中学校も男女共学に移行、同時に「西南学院中学校・高等学校」として再び1つの学校となった。当時、1950年代の中高の感情的な対立は残ってはいなかったものの、「別の学校」の50年の間にそれぞれ独自の進化を遂げ発展してきたため、根幹は同じでも、それぞれの学校の持つ文化、雰囲気はどこか異なったものに醸成されていた。

1950年代の状況を知る教職員の中には数十年前に一度失敗している一貫教育が上手く進んでいくかどうかという危惧があったようで、一貫教育を実現するためには本当に多くの苦心があったようである。

一貫教育実現の前年度、1995年から組織された「中高一貫推進委員会」の働きによって、中高共通の制度や内規が次第に整えられていった。一貫の一期生が高校に入学する1999年度から中高の校長が1人になり（真鍋良則校長）、教員の人事交流も始まって、そこから現実的に一つの学校として機能し始めた。

但し、百道浜校地移転までの6年間は、従前どおりチャペル（現在の大学博物館）を中高で共用するのみであった。勿論礼拝は別々の時間設定であったし、中高生が一堂に会する機会はなかった。敷地が一つながりであるのみで、教職員の人事交流も限定的であった。「全体職員会議」という名目で年に数回、全員での会議が持たれていたが、中高別々の学校であった時間がとても長かったので、それまでのそれぞれの行事や会議の持ち方、時制、時間割の作り方、また教職員間の勤務時間の意識の違い（勤務時間は決められていたが、有名無実であった）、など教職員間の様々な「常識」の乖離は当然存在した。

1993年の臨時理事会で中高の百道浜校地への移転が公表されていたものの、教職員間では日々の目の前の生徒への対応が職務の中心であり、意識は低かったように思う。2000年頃になって、移転が具体化されてきたころから、少しずつ移転が現実のものとなるという意識とともに中高の一体感も少しずつではあるが、醸成されていったように記憶している。「出るも地獄、残るも地獄」と移転をめぐる議論の中で当時の真鍋校長が答えたことをご自身で書き残しておられるが、（後に「出るは煉獄、残るは地獄」と訂正されている。）百道浜校地移転には様々な不安要素もあり、学校としての大きな決意が必要であったのは間違いのないことと思われる。期待と不安の入り混じる中で、中高それぞれの校舎では移転に向けて荷物の整理が進められていった。

3. 校地移転後の中高一貫の歩み～変わったこと～

西新校地での87年分の大切な思い出とそれに相応する膨大な荷物を携えて、2002年度中に百道浜への引っ越しが完了し、2003年4月にいよいよ新校舎での年度がスタートした。これ以降、加速度的に中高の一体感が増していったように感じる。移転後の歩みの中で一番大きな変化は、一つの学校としての一体感を構成員がはっきりと認識できるようになったことと言えるが、その一体感が一貫教育の深化を下支えしている。ここでは中高の一体感の醸成の証左となるであろう、具体的、現実的な変化について以下に少し項目を挙げながら述べていきたい。

(1) 人事交流



上の表は2000年度から2022年度までの中高の教員の入れ替わりの人数合計のグラフである。本校では、前年度の全体職員会議において、翌年度の所属を決定するのが慣例である。この表から分かるように、移転以前から中高の移動は少し行われていたが、移転後、年によって少ない場合もあるものの、漸増していると言える。近年はおおよそ10人前後の入れ替わりがあるのが通例である。言うまでもないが、中学から入学した生徒（一貫生）の高校入学に伴って数名の教員が中学から高校へ移動し、ほぼ同数の教員が高校から中学へ移動となる。このため今後これが大幅に増えることは考えられず、現況が維持されていくことと予想される。

2022年現在、就任後間もない教員を除き、中高のおよそ8割の専任教諭は所属の入

れ替わりを経験している。一部、担当教科等のため、移動が難しい場合もあるが、今後この割合は100%に近づくことが推測される。この中高の教員の移動が、中高の一体感の後ろ盾となっているとすることができる。

(2) 時 制

2021年、中高一貫教育実施25年目にして中高の始業時間が同一になった。

それまでは中学では8時15分に職員朝礼、その後教室で礼拝とホームルーム、8時50分から1限目が開始され、高校ではホームルームなしで7時50分から「0限目」の授業で1日が始まるという中高別の時代が長く続いたが、カリキュラムの変更に伴い、ほぼ中学校の時制に合わせる形で中高とも8時30分のホームルームからの始業となった。これにより初めて中高生が同時間帯に登校することとなり、教員も中高全体で朝礼を実施することとなった。一貫校としての大きな一歩である。

(3) 組 織

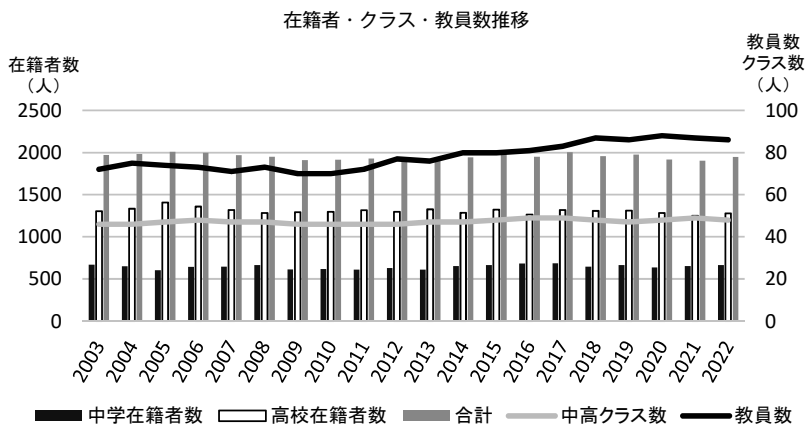
議決機関として中高それぞれに職員会議が置かれるが、「中学職員会議」が年間十数回、「高校職員会議」が年間20回程度開かれ、また年間10回程度「全体職員会議」が開催される。この仕組みは移転以降変化していないが、この2～3年の間に、中高いずれかのみに関わることであっても、大切な事項については全体職員会議で審議する傾向が強くなってきている。このことも中高の一体意識を証明する一例となるだろう。

また、校務を円滑に進めるため分掌制がとられている。長い間、宗教部・教務部・進路指導部・生徒指導部・図書部の5つの部が置かれていたが、2014年度より広報部が新設されることになった。また各部署の責任者である「部長」「主任」の置き方が移転以降、多少変化している。この流れを見ても中高一体での指導が徐々に定着していったことが分かる。

なお2020年度より中highで1名「副校長」が置かれている。(西南学院小学校設置準備に関連して2009年度に1年間だけ臨時的に副校長が置かれた。)

2003年度	中高全体で部長5名、主任5名
2005年度	中高それぞれに主任5名
2014年度	中高それぞれに主任6名(広報部が置かれ、広報主任は中高兼務)
2017年度	中高それぞれに主任6名(進路指導・図書・広報主任は中高兼務)
2020年度	宗教部長・進路指導部長・図書部長・広報部長は中高兼務 宗教主任(中高兼務)・教務主任、生徒指導主任(中高それぞれ)

(4) 在籍者数・クラス数・教員数



上の表は2003年度から2022年度までの本校中学生、高校生の在籍者数及びその合計と中高の合計のクラス数の合計、また教員（専任・常勤）の合計人数の推移を表したものである。

2014年度から中学の定員が200人から220人に変更された。これは隣接する西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れに伴うものであった。クラスの数もその年度から年次進行で中学校は5クラスから6クラスに変更された（その受け入れのため前年度に中学棟西側に4階までの各フロアに1クラス分、教室を増設した）。但し、実際の中高合計のクラス数は様々な要因のため2014年度以降もそれほど変化はない。また、在籍者数もほぼ変わらないことが分かる。

一方で、教員の数には2010年度あたりから少しずつ増えていることが分かる。近年、中高生を取り巻く環境も変化し、同時に教育に対して社会から求められる要素も以前に比較すると確実に多く、その分、担う役割も大きくなってきている。本校では以前から丁寧な生徒指導、また保護者対応を行ってきたが、近年、より濃やかにと求められるようになってきている。このような中で教員は日々多忙を極めることになり、結果としてスタッフの数の増加につながっていると考えられる。

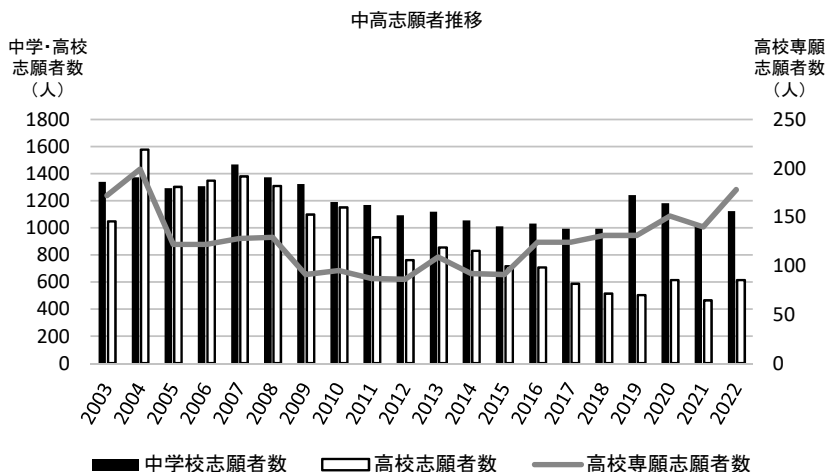
これは直接的には中高の一体感の醸成とは結びつかないが、このような状況の中、例えば生徒指導時でも時に中高での情報交換が大きな鍵となる。そのような折には1つの学校としての力が発揮されることになる。

(5) 西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れ

一体感とは別であるが、移転後の変化について以下に3点記すこととした。

前述のように2014年度、西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れが開始された。その後、毎年60人程度本校に入学することになり、小中高で一貫性のある教育が可能となった。聖書の教えや西南学院の建学の精神、また校歌に6年間慣れ親しんだ生徒たちは中学校での学びを牽引する役割を担ってくれている。建学の精神を同じくする小学校から生徒を迎え、小中高の12年間を通して西南の校風に触れる機会を持たせることについては、小学校や中高のみならず、「キリストに忠実」である人格を育むという観点から、学院全体としても本当に嬉しいことである。

(6) 中高入試制度及び志願者数



中学校入試に関しては、2003年度以降、入試制度そのものに変更はない。但し他校の共学化など、福岡地区の状況が若干変化している。上のグラフから、やや減少はあるものの、ほぼ横ばいで安定して受験生が与えられていることが分かる。

高等学校は、この20年間で入試制度にいくつかの変化が見られた。2003年度は前後期制、前期に専願入試を含んでいた。翌2004年度、前後期制は変わらないが、前期に併せて後期でも専願入試を併せて実施した。その翌2005年度には前後期制と別日程で専願入試が独立して実施されるようになった。その後2017年度より、後期入試を廃止して、専願と前期のみの2回の入試に改めた。受験の機会は減ることになるが、

その分の教職員の力を在校生に注ぐべきであるという思いからの決断であった。

福岡地区の私立高校入試については、この20年間で他校の「生徒募集」への姿勢や動きが大きく変化し、例えば入試等の成績による「奨学金制度」の導入、また入試そのものが形骸化しているような状況もあると聞く。そのような状況下、本校は一貫した従来の姿勢を保ち続けていることもあり、受験生の減少傾向が認められる。特に前期入試の受験生についての検討は今後にも必要になっているが、専願入試の志願者推移からは入学を希望する生徒が多いことが分かる。

(7) 学習環境

西新校地に慣れ親しんだ者として、年月を重ねた校舎の醸す独特の風合いは今でも時折ゆかしく思い起こされる。そのような折には、移転後の現在、西新駅から少し遠くなってしまったものの、快適さや便利さは以前と比較にならないほど整った環境が与えられている現況に、ふと不思議な感覚を覚える。

移転後の大きな改装は前述の中学校校舎の増築のみであるが、2014年3月に体育館（アリーナⅠ・Ⅱ）に空調機器が整えられたことを記しておきたい。近年の温暖化により深刻度を増した熱中症対策のためである。

2017年から年次進行で各教室の黒板上部にロール型スクリーンが取り付けられ始め、移動式のプロジェクターを用いてのICT機器を活用した授業が可能になった。その後、2019年の春には中高全教室に教室前方天井部固定のプロジェクターが配備され、本校のICT環境が整うことになった。

その2019年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大のために、今なお学校現場は全国的に甚だしく影響を受け続けていることは改めて言うまでもないが、本校でもそれを契機としてもう一つ生徒の学習環境に大きな変化が生じた。生徒も教員も各々1台の情報端末（iPad）を持つようになったことである。本校ではコロナ以前から既にiPad導入を企図しており、2020年2月には教員に1台ずつ端末が配られ、その後に生徒端末の計画もあった。故に「感染拡大のために」と表現すると正確さを欠くことになるが、いずれにしても2020年度は約2か月間の休校から始まる異例の状況で、その年度中には中学生全員に生徒用端末が準備され、2021年当初には高3を除き全学年が端末を持つことになったことを考えると、感染拡大が皮肉にも大きな推進力になったことは事実である。2022年度末までには全校生徒が接続可能な校内Wi-Fiが完備される予定である。この一連のICT機器の整備により、生徒の学習ツールは大きく変化することになった。



西南学院中学校・高等学校の正門

4. 校地移転後の中高一貫の歩み～変わらないこと～

学校教育は時代の流れに合わせて、その手段や方法など、表層的な部分を変化させていく。以上触れてきたように、本校もその例外ではないが、ここではこの20年間の歩みの中でも、ほとんど変化のなかった3点について触れる。

中学生と高校生とでは発達段階にも大きな差異があり、また置かれる状況も異なるため、学校行事にも違いがあるのは当然である。中高合同での行事は現在のところ、4月の合同始業式対面式、創立記念式典のみである。中高の行事の内容としては、以前から各々大切にしてきたものを、現在も継続して実施している。それは、中学校では最大の学校行事という位置づけの体育祭、合唱発表会、また平和教育の集大成としての沖縄修学旅行であり、高校では文化祭、スポーツフェスティバル、林間学校である。これらは、小変更はあっても基本路線はほぼ変わっていない。

一貫校の場合、中高で全く同じか、一部のみに差異があることが多い制服についても、本校の場合、移転後もそれぞれ異なったスタイルを踏襲しており、基本的な変更はない。ただ、ジェンダーレスの観点から、ジャケットスタイルの高校では2020年度よりスカートやパンツなど、制服の選択に大きく幅を持たせている。一方中学校では男女共学化以来、「女子用」としてセーラー服にオーバージャケットというスタイルを採用しているため、アイテム選択では解決できず、デザイン等を含めて現在検討を継続している。

部活動についても、運動部・文化部（同好会を含む）合わせて、中学校で23～25程

度、高校で40程度の部が活動しており、移転後ほとんど変化はない。ただ入部率が近年少し低下傾向にあることは全国的な傾向ともなっている。

さて、100年以上の長い歴史を持つ本校には、長きに亘って堅持してきた揺るぎない建学の精神が据えられており、その精神に立つ教育の実践を追求する姿勢に変化がないことは言うまでもない。また連綿と受け継がれてきた自由な校風は、移転しても、またその後20年経過しても、変わらず次の世代に受け渡されていっている。本校の教育の根幹部分は変化するべくもない。

5. おわりに

元々別の学校として、それぞれ独特の文化を持ち雰囲気を纏ってきた西南学院中学校と西南学院高等学校が、新しい場所で1つの学び舎に置かれることを経て、建学の精神を同じくするだけでなく、一体感を伴った1つの学校となっていく過程を目の当たりにしてきた。

当然のことであるが、この一体感の醸成にはその根幹に神様の存在、また「キリストに忠実なれ」という創立者ドージャー先生の祈りがある。そしてその意志を受け継いできた教職員の思い、「目の前にいる子どものために」という、教職員に共通した熱く固い思いがある。加えて6年間に亘って生徒の成長を見守ることができる喜び、その喜びを共有するところから生まれる連帯感があるのだと思う。この場に共にあるという喜び、一体感が本校の根底にはあって、それが今の姿、一貫教育の深化を支えていることに疑う余地はない。